

第1群:環境に最もやさしい群 新潟・島根などの県が属する。特徴は第2群と似ている。総排出量が最も低く、その他のごみの割合も一番低い。

第2群:田舎の群 青森・沖縄などの県が属する。田舎の県が集中した。全体的に排出量が少ない。

第3群:全体的にごみの排出量が多い群 東京や愛知といった都市部の県が集中。ごみの排出量は全体的に多い。

第4群:リサイクルに対する意識が低い群 京都・大阪・和歌山・福岡の4県が属する。大阪[4]によれば大阪は可燃ごみと資源ごみを混合収集しているため、その他のごみが多い。大阪に限らずこの群に属した県はこのようなことを行っているだろう。

6 正準相関分析

第5正準変量の結果が矛盾したため、ここでは第4正準変量まで扱う。

第1正準変量 「総排出量の軸」

(第1正準相関係数:0.9995)

図2を見ると、右上に行くほど総排出量の高い県である。総排出量の重回帰分析結果とは違う結果になったが、飲食料品(商業)と書店も総排出量が高い原因とも言える。

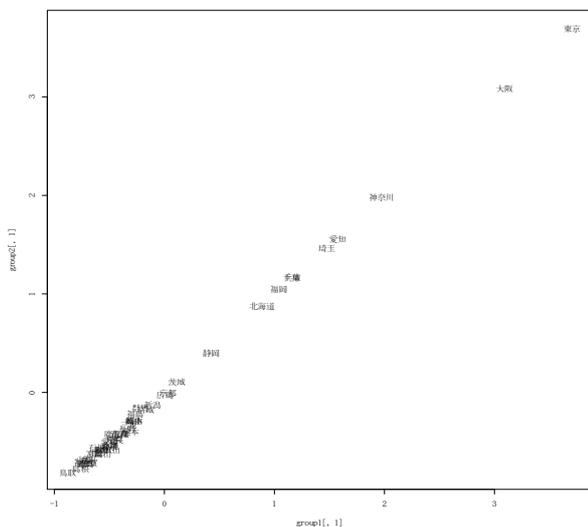


図2 都道府県の値(第1正準変量)

第2正準変量 「その他のごみに関する軸」

(第2正準相関係数:0.9910)

人口密度が高いほどその他のごみが増えるといった結果になった。また、書店はその他のごみが多い要因ではないと言える。

第3正準変量 「可燃ごみと書店に関する軸」

(第3正準相関係数:0.9799)

書店が多いほど可燃ごみが増えるといった結果になった。一見、雑誌や本は資源ごみに回ると思われがちだが、

それらの中には捺染紙等のリサイクルに回すことのできないものも含まれている。それらは可燃ごみに回されることになっているからこういった結果になったと思われる。

第4正準変量 「資源ごみに関する軸」

(第4正準相関係数:0.9297)

散布図の軸は右下がり、左上に大阪や京都といった資源ごみの割合が低い県が目立つ。解析結果から考えると「資源ごみに関する軸」と言うことができる。また、資源ごみが多く出る地域は人口密度と可住地面積割合が高く、主に総合スーパーから出ているものと思われる。

7 まとめ

排出量に関していえば都会や田舎といった環境に左右されるものであると言える。東京や愛知などの都市部の県は排出量が多いもののリサイクルに対しての姿勢は積極的である。この姿勢を貫けばより自然環境にやさしい都市になっていくと思われる。逆に大阪や京都といった県は、可燃ごみと資源ごみを混合収集するなど、リサイクルに対しての姿勢は消極的である。対策としては分別の徹底とリサイクル推進を掲げればよくなると思われる。結局のところ自然環境によいかどうかは、ごみの排出量の多い少ないではなく、人々の意識とその行動と言うことができる。

8 おわりに

今回の研究を通して、ごみが排出される背景が分かった。また、大阪のようにリサイクルに対する意識が低かったり、分別を怠っている県があったのには驚いた。自然環境に良い社会を作るためにはリサイクルと分別が大切であることが改めて思い知らされた。もう一度ごみ問題について考えるべきであり、それと同時にリサイクルを活性化するためにはどうすべきかを考え、それを推進することが大切であると思う。

参考文献

- [1] 朝日新聞社,『民力 2005年版』,朝日新聞社,2005.
- [2] 朝日新聞社,『民力 2009年版』,朝日新聞社,2009.
- [3] 井上勤・桑山知裕:卒業論文『S-plusにおける回帰分析の変数選択関数の作成』,南山大学経営学部情報管理学科卒業論文,2001.
- [4] 大阪の一般廃棄物(平成20年6月作成):
<http://www.pref.osaka.jp/attach/929/00006607/H18-sankou02.pdf>
- [5] 環境省 平成21年度調査結果:
http://www.env.go.jp/recycle/waste_tech/ipp-an/h21/index.html
- [6] 財団法人 矢野恒太記念会,『データでみる県勢 2011』,財団法人 矢野恒太記念会,2011.
- [7] 統計でみる都道府県のすがた 2011 総務省統計局:
<http://www.stat.go.jp/data/ssds/5a.htm>
- [8] 平成23年環境統計集:
<http://www.env.go.jp/doc/toukei/contents/>